

小倉山二尊院は愛宕の南にあり、宗旨は〔天台、真言、律、浄土〕四宗の兼学なり。

風雅 小倉山麓の寺の入相にあらぬ音ながらまがふかりがね 俊成

続後撰 小ぐら山すその、里の夕霧に宿こそ見えね衣うつなり 順徳院

新千載 夕ざれば霧立ならし小倉山やまのと陰に鹿ぞ啼なる 鎌倉右大臣

新古今 小ぐら山ふもとの里に木の葉ちれば梢にはる、月をみる哉 西行

当院の本尊は釈迦阿弥陀の二尊なり、立像にして発遣来迎の相をあらはせり。念仏堂には法然上人の影を安置す、中門

の額は後柏原院の宸筆にして小倉山とあり、本堂の額二尊教院は後奈良院の宸翰なり。〔いにしへの額は小野道風の筆

にして、二尊教院と書して四足門にかくる。然るに門前の池より夜々靈蛇登りて額の文字を嘗る、これを防がん為に額

のかたはらに不動の像を書せけれどもいまだ止す。正信上人かの蛇の執を救はんために、みづから円頓戒の血脈を書て

池にしづめらる。然るにかの池より千重の白蓮花一もと生ず、是ぞ誠に龍女成仏の証なりとて、かの花をとりて什宝と

す、今にあり。池の汀の辨才天の社は龍女を勧請しけるなり〕当院は嵯峨天皇芹河野に行幸の時、ならびなき勝地なり

とて此所をひらき給ひ、華台寺ならびに二尊教院と号せり。夫より連綿として無双の靈場となる。其芳躅をしたひ、醜

酬帝の皇子兼明親王此ほとりに山莊を営、雄蔵殿と称す。其後星霜かさなりて中興法然上人閑居し給ひ、元久元年十

一月七日一宗機範の式七ヶ条の起請文を制せられ、自筆を染て判形をすゑらる。当院第二世信空上人を始め、西山上人

等百八十九人起請に同ぜらる、おのゝく自筆に名を書れけり。「熊谷二郎直実も九十人目に出て、法名を蓮生とするす」又神変の舍利を安置す。「法然上人此舍利につきて式を作りて曰、仏子牟尼の遺教によりて浄土の一門を信じ、毎日七万遍の念仏を修して既に多年の星霜をつむ、順次往生の望いまたのみあるものか、是釈尊の恩徳なり、尤も報謝すべしとぞ書れけり」

足引の御影其伝に曰、月輪禪定殿下法然上人に御帰依の志深く、尊敬のあまり上人の真形を写さんと仰ける、上人かたく辞して退出せらる。其後上人召請せられ、浴室に入沐浴ありて、衣を着し念仏し給ふ、休息の間、画工法眼宅磨こ、にありて、簾中より密に窺しめ、其形相をうつさせらる。丈六に坐し給ひて、一方の足先き出たり、只だこゝろなくありのまゝに画せり。上人重ねて参り給ふ時、殿下此寿像をかけて開眼供養とぞ宣ふ。上人驚き此足の出たるは平懐の形なりとて、持念せられしかば忽然として其足引れ坐せらる姿となる。是偏に上人の奇特又は絵師の名譽なりとて、人々奇異の思ひをなしにける。是より足引の御影とぞ称しける。

法然上人の第二世正信房湛空は、徳大寺左大臣実能公の孫なり。菩提の真路を願ふ志深かりければ、浄土門に入つて当院を再興し、土御門院後嵯峨院二代の国師となり、寛喜上皇御帰依の勅命にまかせ、御遺骨を当山の御塔に納め奉る。「当山西の山上にあり」三世正覚上人も、後深草院龜山院後宇多院伏見院の国師たり。当院の縁起は伏見宮貞敦親王西三条公条卿の両筆なり。外題は後奈良院の宸翰にして、画は土佐光信なり。大聖文珠の三衣、伝教大師の五条袈裟、慈

覚大師かくだいしの三衣、皇慶阿闍梨くわうけいあざりの袈裟あり。「此袈裟は護法神現れて天竺てんちく無熱地むねつちに行て灌かんひしなり、北大原おほはらに袈裟石けさいしあり」
其外五銚等、伏見院ふしみのあんよりの御寄附として当院の什宝なり。

黄門定家卿くわうもんていかきやうの山莊さんじやうといふ旧地は、仏殿ぶつだんのうしろの山腹さんはらにあり。かの卿より以前当院諸堂しよたう魏々ゑゐたり、後世ごせい小倉山こくらやまに寄りて
号る物か。「定家卿ていかきやうの山莊さんじやう次下に著す」